

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本に根ざした老華僑

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽, 張, 玉玲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5083

在日中国人

遠く故郷を離れ、異国の地で助けあいながら独自の文化と伝統を築いてきた華僑たち。日本社会への定着と世代交代が進むなか、あたらしい中国人意識をもつ新華僑も台頭し、中国系の人びとの社会にも変化のきざしがあらわれている

日本に根ざした老華僑

張 玉玲 ちょうぎょくれい / 陳 天璽 ちんてんじ



華僑証明書。1930年代、中華民国愛媛県華僑聯合会によって発行されたもの。聯合会の会員であることを証明するもので、船や鉄道などで移動する際は携帯が義務づけられていた。林聖福蔵

長崎、神戸、横浜の中華街は、日本のなかの中国としてその名を馳せている。こういった観光地をつくりあげたのが、何百年も前に日本にやってきたいわゆる「老華僑」である。

日本の華僑社会の歴史は、16世紀の長崎開港（1571年）に遡る。当時来日した中国人は、「唐人」と名乗り、「唐船」に乗って、日中間の貿易に携わっていた。長崎のみが貿易港に限定

されていた江戸幕府における鎖国時代には、中国から生糸、砂糖、薬などが、日本から金、銀、銅などが輸出入されていた。中国人人口が増加していくにつれ、長崎にあった悟真寺は華僑の菩提寺となり、唐人墓地もつくられていった。こうして長崎に日本最初の華僑社会が形成された。九州は、中国との一衣帯水の関係ゆえに、中国と長い交流をつづけてきた。漢字、漢文は



老華僑のアルバム。日本で撮った写真や、故郷の友人たちとの写真が収められている。林正茂蔵

もとより、^{ちまき}粽、饅頭、茶、麵など、日本は実におおくの中国物産、文物を取り入れた。古来より朝廷も民間においても唐人、華僑の持参物を珍重するという伝統がある。また、たとえば現在長崎名物となっている長崎くんち祭(九日祭)や龍踊なども、華僑と日本人が「共生共栄」する長崎の特徴を物語っている。

助けあい 独自の社会をきずく

現在の老華僑が日本全国に展開したのは、1859年開港以降である。横浜、神戸、箱館などの5港での通商が認められると、これらの港の近郊に設けられた外国人居留地に欧米人に随行して中国人もやってきた。彼らは欧米商人と日本人のあいだに立ち、取引契約を仲介する商人、いわゆる「買弁」として活躍した。また、中国人が外国人居留地に隣接する一角に集中して居住するようになり、徐々にコミュニティが形成された。横浜も神戸も、チャイナタウンが外国人居留地だった元町の隣にあるのはこのためであると考えられる。

おなじ出身地やおなじ職業の中国人は互いに助けあう伝統がある。現在でも残っている同郷会館、公所は中国人の相互扶助の組織として設立されたのである。広東出身華僑による「広東会館」や、浙江、江蘇、江西出身華僑による「三江公所」および福建出身華僑による「福建会館」などは、その代表

である。そして、これらの同郷組織を統括する上位組織として「中華会館」が存在していた。これらの組織は、華僑間の連携の強化や、日本での生活向上などに大きく貢献した。しかし、老華僑の日本社会への定住が進むにつれ、伝統行事(たとえば長崎や神戸、京都の福建同郷会による普度勝会)や会員間の親睦を図るための旅行を主催する以外、会館や公所などの果たす機能は弱まってしまった。

教育を重視する中国人は、海外に渡っても子どもの教育を怠ることはなかった。近代日本の教育制度に影響され、中国国内に先立って横浜大同学校(1898年設立、現在の横浜中華学院と横浜山手中華学校の前身)と神戸同文学校(1899年設立、現在の神戸

中華同文学校の前身)という近代的学校が設立された。その後も、華僑学校は各地に設立されていったが、現在残っているのは、上記の3校以外に、大阪中華学校と東京中華学校の2校、計5校となった。華僑学校は民族教育を貫き、華僑社会だけでなく、中国、台湾および日本社会におおくの人材を送りだした。華僑社会の精神的拠りどころと称されるほどである。現在、華僑学校は、中国語と日本語のバイリンガル教育や中華文化の継承・発揚に力を入れ、華僑のほかにも、日本人生徒もおおく受け入れている。国際的な人材育成の面で地域社会への貢献は大きいものの、華僑学校は、補助金と進学の資格において、法的に正式な学校と区別される「各種学校」に位置するという苦悩も抱えている。



老華僑、来日初期の職業「三把刀」のうちの一つ、「仕立屋」のハサミと道具。西洋人につきそって来日した上海テーラーは、後に日本の財界や政界など多くの有名人の服も仕立てた。福昌号蔵



1980年代、華僑二世の青年と結婚した台湾人女性の花嫁衣装。日本で行われた披露宴で着たもの。ウェディングドレス、カクテルドレスの後に、お色直しでこれを身にまとった際、中国獅子舞も披露された。林芬恵蔵



結婚証明書。美しい刺繍がほどこされている赤字の台紙に両家の喜びを表す「双喜=囍」の文字が金箔で印刷されている。人前結婚が通例で、紹介人や証婚人(証人)のサインが記されている。林芬恵蔵

高まる中国文化への関心

「落葉帰根」、つまり葉が落ちいずれ根っこに帰る、というたとえのように、華僑は、望郷の念がつよく、旅先やよそで死亡したとしても骨だけは故郷に埋葬して欲しいと希望する。いまでも横浜や神戸などに中国人墓地があるが、1920~30年頃までは死者を入れた棺が故郷に送られる前の仮埋葬場であった。今ではお墓や葬式などはだいぶ日本化してきたが、故郷の名残はまだみられる。

他界した祖先は、あの世で自分を守ると、華僑は祖先を崇拝・祭祀する。とくに父系の祖先に対して、遺骨を納めた墓地あるいは位牌を安置した建物(家庭内の正庁など)において、清明節(せいちよう)、冬至、春分、秋分などの年節に定期的な祭祀をおこなう。子孫は祖先に対し、食べものや紙製の衣類(紙衣)、家(冥宅)、紙銭などを供えて祭祀をおこなう義務を負うが、そのように正しく祀られた祖先は、子孫に対し庇護と恩恵をもたらすと考えられてきた。また、福建出身華僑によって、毎年長崎、神戸と京都でおこなわれている普度勝会は、祖先だけでなく孤魂をも供養する集団的な祭祀行事である。これによって、人間と超自然的存在(神・鬼)の関係性を再確認し、コミュニティの人間関係を強化するのである。

1980年代以降、日本人の中国文化への関心が高まり、長崎、神戸と横浜の中華街の観



中国の楽器
揚琴(ようきん)。
1930年代、華僑が来日の際
もちこんだ楽器は、同郷の人びとの集いの場で、
にぎわいを生む娯楽となった。梁兆華蔵

光化が進んだ。その影響をうけて、三代目と四代目に突入した華僑は、華僑の伝統的な文化を継承しながら来街者の日本人も楽しめる要素を取り入れた行事や芸能を考案し、中華街を舞台にあらたな「華僑文化」をつくりだしている。春節祭(2月前後)や閩帝誕(7月か8月)、国慶節(10月)などに披露される獅子舞、龍舞、民族音楽・舞踊などは、いまでは中華街の風物詩となっている。

獅子舞は、19世紀後半、広東出身の華僑によって故郷から日本にもちこまれた。とくに横浜の獅子舞は中断することなく、何世代にもわたって継承されてきた華僑の代表的な伝統文化である。1980年代後半には、華僑青年たちが東南アジアの華僑との交流をとおして獅子舞を習得したが、それは、伝統的な風格を残しつつ、中国武術の精華とアクロバティックな性格をそなえている。一時中断した長崎や神戸においても、獅子舞は中華街の観光化とともに台湾や横浜華僑の協力によって復興され、現在街のイベントに欠かせない存在となっている。



20世紀初期、福建から来日した華僑が持ってきた旅行カバン。新天地(日本)での生活に必要な衣料、そして薬、家族の写真などが中につめられ、海を渡ってきた。林聖福蔵



中国南方の獅子舞。華僑社会に受け継がれている伝統芸能は、在日中国人のアイデンティティの象徴であるだけでなく、日本各地の祭典でも人気者だ。横浜中華街



龍舞。300年前、中国人によって長崎へ伝えられた。長崎で親しまれている龍舞は、深緑の背に赤い身の龍が主だが、近年神戸や横浜など他の華僑社会で舞われる龍は金や夜に光を発つ夜行龍など多様化している。神戸で最長40メートルある金龍は総勢30~40人で舞う。演舞者のおおくは日本人のボランティアだ。撮影・山村規子

存続させるための模索

これらは、華僑の世代交代と日本社会への定着が進んだあらわれであり、同時に、日本という地で生まれた華僑独自の文化である。華僑学校で中国語を身につけていても、人称代名詞だけは中国語、ほかには日本語で話すという華僑の独特な話し方「華僑語」もその一例といえよう。これらの文化およびその表象をとおして、華僑は自己を表現し、華僑としてのアイデンティティを主張すると同時に、日本社会における自分の存在をアピールしている。神戸華僑自身の力で創設・経営されている神戸華僑歴史博物館（1979年開設）は、世界でも貴重な資料を残している。華僑の歴史だけでなく、さまざまな分野における活動や日本社会への貢献なども紹介されている。その趣旨は「落地生根」（その土地に根を張る）という語で表現され、華僑は日本社会に融合したことを意味し、その一員として認めてほしいという華僑の思いがこめられている。

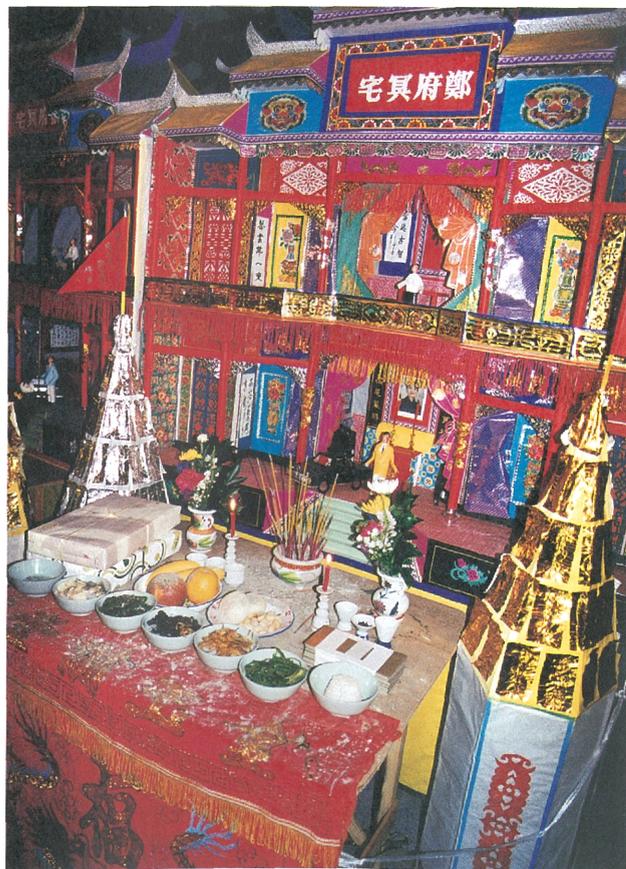
1978年中国改革开放政策が実施された後、おおくの中国人があらたに日本に流入してきた。いわゆる「新華僑」である。新華僑は、留学や研修の目的で来日した者がおおく、東京などの首都圏にその半数が集中しているものの、全国各地に分散しているのが特徴である。それに対して、老華僑は相変わらず横浜、神戸、大阪などの旧開港地に集中し、華僑学校、同郷会などをおして確固たるコミュニティを維持して



神戸の関帝廟。中国の三国時代の有名な武将である「関羽」がまつられている。信用を重んじた関羽は、商売の神さまとも言われ、華僑に信奉されている。神戸の関帝廟は、戦後日本の棟梁が中国風の様式を取り入れて建てたもので日中折衷のユニークな建築となっている



燃やし、あの世に送られる冥宅



冥宅（めいたく）。毎年、旧暦のお盆の頃、福建の華僑が主催し神戸の関帝廟でおこなわれる。普度勝会では、亡くなった祖先や施餓鬼（せがき）が、あの世で不自由なくくらするようにと、「冥宅」がまつられ、祭の最後に燃やされる

いる。また、1949年から中国の門戸開放までの30年間にもわたる祖国との交流の断絶を経た老華僑は、中国で教育をうけ、あたらしい中国人意識をもつ「新華僑」と異なり、伝統的な中国人の価値観をもち、伝統文化を維持している。そのためであろうか、おなじ「中国人」ではあっても、新華僑と老華僑は、ほとんどかかわりをもたないふたつのグループとなっている。

現在の老華僑社会を受け継いでいくと思われるものは、おもに三世、四世以上の世代の華僑である。彼らは、中国語より日本語を得意とし、日本への同化が進んでいるのが事実だ。なかには、二世たちが維持してきた中国人コミュニティを離れていく者もいる。そのため、前述した同郷会館や中華会館などは後継者不足に悩まされ、「老華僑社会はいずれなくなる」という危惧の声が高まっている。新華僑をいかにメンバーとして老華僑社会に受け入れるかが、最大の課題となっているようだ。

